

琉球大学学術リポジトリ

うつ病とその治療に対する一般住民の意識と態度の改善に焦点化した啓発講演の有用性について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yakushi, Takashi, 薬師, 崇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41465


(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Usefulness of an educational lecture focusing on improvement in public awareness
of and attitudes toward depression and its treatments

(うつ病とその治療に対する一般住民の意識と態度の改善に焦点化した啓発講演の有用性
について)

氏名 薬師 亨 

【研究目的】本邦の1998年から2011年における自殺者数は年間3万人を超え、自殺率は人口10万人あたり25.2から27.0を推移しており、世界的にみても高率を維持している。このため、自殺予防に向けた多角的な戦略を確立することが急務となっている。うつ病は自殺の有力な危険因子の一つであるが、うつ病に関する一般の偏見や誤解はいまだ根強く、自殺予防の大きな阻害要因となっている。そこで、われわれは、一般住民におけるうつ病およびその治療に関する意識と態度について独自の調査項目を用いて評価するとともに、通常の知識を提供する一般講演と偏見是正に特化した焦点化講演の2種類の介入を行い、その効果を比較検討した。

【方法】対象は834名（245名；男性、589名；女性）の一般住民であり、367名が一般講演を受け、467名が焦点化講演を受けた。講演前後でうつ病認識に関する8項目（恐怖、知識不足、性格の弱さ、恥、迷惑、現実逃避、

自覚への過信、自己制御への過信) および治療への構えに関する 10 項目 (援助希求、家族への相談、一般医受診、精神科受診、カウンセリング、薬物療法への抵抗感、薬物依存への不安、薬物療法の効果判断、維持療法、励まし) に関してアンケート調査を行い、各項目を 5 段階で評価した (1 = 全くそう思わない ~ 5 = とてもそう思う) 。上記 18 項目について因子分析を行うとともに、介入前の認識・構えに関して性および年齢の影響を検討し、性別の影響には t 検定を用い、年代別の比較には ANOVA を用いた。講演の種類を含めた諸因子の介入後の認識・構えに対する影響の検討には重回帰分析を用いた。

【結果】 18 項目の因子分析から、疾病モデル認識 (Cronbach's $\alpha = 0.73$) 、援助希求行動 (0.73) 、うつ病への否定感情 (0.66) および非薬物的解決志向 (0.75) の 4 因子が抽出された。介入前後の認識・構えにおいて、高齢者では疾病モデル認識が低い一方、うつ

病への否定感情が高く ($p < 0.05$)、若年者では援助希求行動が低かった ($p < 0.05$)。焦点化講演は一般講演よりも疾病モデル認識を高め、非薬物的解決志向を是正した ($p < 0.05$)。

上記4因子の介入後スコアはそれぞれ介入前スコアの影響を最も強く受けたが ($p < 0.01$)、介入前の疾病モデル認識は介入後のうつ病への否定感情や非薬物的解決志向にも有意に影響を与えた ($p < 0.01$)。

【結論】うつ病に対する啓発講演を有効に行うためには、年齢により認識・構えの改善度に違いがある点を考慮に入れるべきと考えられる。すなわち、偏見是正に特化した焦点化講演はより疾患モデル認識を高める点で一般層への浸透度は高いが、高齢者への効果は限定的なものに留まることが予想され、一方で、援助希求行動の低い若年者に対してはむしろ別の介入戦略を検討する必要があると考えられる。